

新しいアートの流れを大阪から世界に

大阪中之島美術館が今年2月に開館。

菅谷富夫館長に聞く。



2022.2.1 テープカット

大阪中之島美術館が2022年2月2日、水都・大阪のシンボル・中之島に開館しました。大阪市制100周年記念事業の一つとして近代美術館建設構想が打ち出されてから39年、準備室が設置されて30余年。激しい社会変化を乗り越えて、市民待望の文化的拠点の誕生です。2025年の大阪・関西万博に向けて大阪が新たな都市の未来を開こうとしているいま、どのような美術館を目指しているのか。菅谷富夫・同美術館長にお聞きしました。(聞き手・ジャーナリスト、池田知隆)

菅谷富夫によると、この開館式には、PFI法によるコンセッション方式(民間事業者が経営に直接携わる公共施設等運営事業)を日本の美術館として初めて導入しました。「民間の知恵を最大限活用しながら、顧客目線を重視し利用者サービスに優れたミヨージアム」として、大阪という都市の魅力の発展、進化、発信のための新たな美の拠点づくりに挑戦しています。

待望の開館を迎えるにあたり、菅谷富夫は、「これがだけ大きな美術館が新設されるのは国内外でもひさしぶりのこと。しかも、PFI法によるコンセッション方式(民間事業者が経営に直接携わる公共施設等運営事業)を日本の美術館として初めて導入しました。『民間の知恵を最大限活用しながら、顧客目線を重視し利用者サービスに優れたミヨージアム』として、大阪という都市の魅力の発展、進化、発信のための新たな美の拠点づくりに挑戦しています。

菅谷富夫によると、「黒い直方体」の斬新な外観ですね。黒という色は嫌味を感じさせません。黒い建物のところどころにあるガラス面から光があふれて、あの中には何があるのだろうか、好奇心をそそられます。中之島という多様な都市施設がある中で美術館の存在を浮き立せるデザイン的な特徴だけではありません。ガラス張りの建物は光を反射しますので、黒い壁で囲った建築は周囲の環境への影響にも配慮しています。

菅谷富夫によると、「黒い直方体」の斬新な外観ですね。黒という色は嫌味を感じさせません。黒い建物のところどころにあるガラス面から光があふれて、あの中には何があるのだろうか、好奇心をそそられます。中之島という多様な都市施設がある中で美術館の存在を浮き立せるデザイン的な特徴だけではありません。ガラス張りの建物は光を反射しますので、黒い壁で囲った建築は周囲の環境への影響にも配慮しています。

大阪中之島美術館が2022年2月2日、水都・大阪のシンボル・中之島に開館しました。大阪市制100周年記念事業の一つとして近代美術館建設構想が打ち出されてから39年、準備室が設置されて30余年。激しい社会変化を乗り越えて、市民待望の文化的拠点の誕生です。2025年の大阪・関西万博に向けて大阪が新たな都市の未来を開こうとしているいま、どのような美術館を目指しているのか。菅谷富夫・同美術館長にお聞きしました。(聞き手・ジャーナリスト、池田知隆)

「展覧会入場者だけでなく幅広い世代の人々が誰でも気軽に自由に訪れることができる賑わいのあるオープンな屋内空間」として公募設計コンペで選ばれたのが建築家、遠藤克彦氏による提案でした。1階から5階までの吹き抜け天井から柔らかく光が降り注ぐ立体的な空間になっています。

ときに船員の心を癒したり、天候を読んだり、危機を察知する能力もあり、「守り神」とされました。未来を見通せるように、目やヘルメットを光らせ、勇気や冒険心を象徴するため鎧のような衣装をつけ、美術館とともに未来を旅するパブリックアートです。

さらにこの広場は、堂島川に面した旧広島藩蔵敷の跡で各地の船が出入りしている船着き場がありました。この地からKを通過して世界につながり、新しいアートの潮流を発信していきたいですね。

吉原治良(よしはら・じろう)の作品約800点などを含め収蔵品は6000点を超えます。近代美術を中心とした海外の作品が約800点。残りの作品は日本の作品で、その中に油彩約400点、日本画約200点、水彩・素描約600点などが含まれます。

デザイン分野の作品も多く収集しています。休館したサントリーミュージアム「天保山」からは近代から現代に至るポスターの大コレクション、「サントリーポスターコレクション」をお預かりしており、世界のデザインミュージアムと比べても遜色ありません。

収蔵品の特徴は。

佐伯祐三の「郵便配達夫」などのコレクションや福田平八郎画伯の日本画「漣」のほか、モディリアーニの「髪をほどいた横たわる裸婦」などの世界的に知られる作品もあります。これは1989年に19億3000万円で大阪市が購入し、地方自治体が購入した作品では一番高いといわれています。また関西の前衛的な美術グループ「具体美術協会」リーダーの

大塚には府立の美術館はなく、これまで大阪での美術の存在感は薄いような感じがしていましたが、大阪では江戸期から多くの商人たちが美術品を収集し、芸術に造詣の深い商人も少なくありません。中国の影響を受けた文人画は大阪がその中心地のひとつでした。商人の間では習い事が盛んで、戦前期には意外なほど多く女性の美術作家が生まれています。安井伸治(やすいなかじ)など、昭和初期には多くの写真家も活躍しています。紙を扱う商店に生まれた安井伸は多彩な分野で才人と認められ、技巧に走らない人間的な作品を数多く残しています。

戦後、「具体」をリードした吉原治良は油屋(後の吉原製油)に生まれ、作品が売れることがないことをやり、最先端の前衛作品を多く生み出しています。大阪には常に新しいアートを生み出す土壤がありました。具体的なメンバーで美大へ行ったのは2、3人で、吉原治良はじめ独学の作家が多い。それでも世界的な美術家になれるというのが大阪の美術の大きな特徴でした。

大阪は、意外にも「美術都市」だったのですね。

そうです。近代日本の美術史は、フエノロサ・岡倉天心に始まる東京美術学校・東京藝術大学を中心としてつくられてきました。しかし、それとは異なる文脈で大阪の美術という



大阪中之島美術館 外観

吉原治良(よしはら・じろう)の作品約800点などを含め収蔵品は6000点を超えます。近代美術を中心とした海外の作品が約800点。残りの作品は日本の作品で、その中に油彩約400点、日本画約200点、水彩・

ものが江戸時代からあり、市民の間で楽しみながらさまざまなアートを生み出してきたのです。大阪という視点からみれば、こんな美術の歴史があつたのか、こんな人物がいたのか、という新しい発見があります。これまでのアカデミックで単線的な美術史や西欧中心の世界だけではなく、もっと多様な視点を導入することで、新たな可能性を拓かれます。それこそ、かつて中之島に本拠地を持ち、世界を驚かせた吉原治良と眞体の精神を受け継ぐものです。

各地の展覧会で選考委員を務めた経験からも、入選者のうち大阪出身の人がとても多いという印象があります。大阪出身のアーティストから「大阪には美術館がないから、死後、作品を収めるところがない」という嘆きを聞かされたこともあります。大阪の美術を振興していく役割も果たしていきたいですね。

それにしても、開館までの準備期間が長かったです。準備室に入られた時、菅谷さんはおいくつだったのですか。

菅谷 富夫(大阪中之島美術館館長)

1958年千葉県生まれ。財団法人滋賀県陶芸の森学芸員、大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を経て2017年より大阪中之島美術館準備室長。

2019年初代館長に就任。近代デザイン、写真、現代美術の分野を担当する一方、新しい美術館整備を統括する。館外においても上記分野の批評・評論活動を多数行う。担当した主な展覧会は「美術都市・大阪の発見」展(1997年)、「早川良雄の時代」展(2002年)など。共著に『都市デザインの手法』(1998年)、『デザイン史を学ぶクリティカルワーズ』(2006年)など。

平成4(1992)年の春、34歳でした。大阪市が市制100周年を記念して近代美術館建設の基本構想を発表したのは昭和58(1983)年で、それから9年後、美術館建設準備室が発足して2年目です。バブル崩壊に伴う財政問題が浮かび上がり、平松市政から維新・橋

いくつだったのです。準備室に入られた時、菅谷さんはおいくつだったのですか。

平成4(1992)年の春、34歳でした。大阪市が市制100周年を記念して近代美術館建設の基本構想を発表したのは昭和58(1983)年で、それから9年後、美術館建設準備室が発足して2年目です。バブル崩壊に伴う財政問題が浮かび上がり、平松市政から維新・橋

21世紀の新しい美術館として目指していることは、一つは機能として「アーカイブ」、次に様々な施設・機関と「連携」、そしてさきほどお話しした「大阪からの視点」です。大阪から見る美術館では展覧会の活動は基本ですが、その一方で、アーカイブ機能も充実していく必要があります。美術館のアーカイブとは、作家や美術作品にまつわるスケッチや写真、手紙、展覧会記録といったあらゆる資料を収集し、整理・公開する機関のこと。美術作品のコレクションと一緒に、資料が展覧会で目の目を見る機会は限られています。収蔵されながら外部には存在する知られることのないケースも多く、各美術館の資料センター的なものが日本では定着しています。

当館では、所蔵する全アーカイブ資料のデータベースを公開する予定です。資料名や作家名、年代などの情報をパソコン画面上で検索し、概要を確認した上で、必要な資料があれば手続きを経てできる限り現物を見られるようになります。貴重な資料も手続きすれば見られるようにして、各館で資料情報を共有できることにしていきたいですね。

連携による活動も重視しています。学芸員は10人ですが外部の専門家と一緒にアート・カイブや美術館教育も進めたい。美術館はプラットフォームで、多くの人が来て、何かを得て帰つてもらいたい。アートを楽しむための基盤づくりをするのが美術館の仕事です。で、他館ともノウハウを共有し、文化資源の活用を目指していきます。

下市政への転換などもあり、何度も基本計画を変更しています。美術館を取り巻く環境が変わり、時代に合わせるかたちで、30年かけて新しい美術館のあり方を模索してきました。いつも思っているのは、大阪に行くのならあそこだよね、といわれるような美術館にならたいということ。大阪の美術館として積み重ねてきたものを、ぜひみなさんごらんいただきたい。

アフターコロナの時代、ネット社会での美術館の役割も。

ネットでさまざまな美術品が高精細できれいに見ることができます。ネットの配信がさらに進めば、仮想現実(VR)の世界が広がり、美術館にとっても厳しい状況が続きます。デジタル映像の作品がどんどん出てきて、遠くない将来には目を通さず、建物や組織はどうなるのか、ということを考えます。

しかし、果たしてそれだけでいいのでしょうか。絵画の鑑賞は、美術史上での評価というより、個人的な体験と結びついています。例えば佐伯祐三の作品について「昨年亡くなった母と展覧会で観た『恋人との初めてのデートで観た思い出があります』などと、極めて個人的な感想をよく聞かされます。そのように美術館に来て見るのはとても重要な体験となつています。

美術館経営は非常に厳しくなっています。かつて何十万人もの来場者で成立していた展覧会が、コロナが終息後もそのまま、多くの人に美術館に来てもらえるようになるでしょうか。それでも作品を見たい、美術館に行きたいという需要がなくなつたとは考えていました。多くの方々に足を運んでいただける展覧会の開催はもちろんですが、訪れることが本身が楽しみとなるような施設や機能を備えていきます。市民にとって「ここから始まるアート」を動かすプラットフォームとなることを大阪

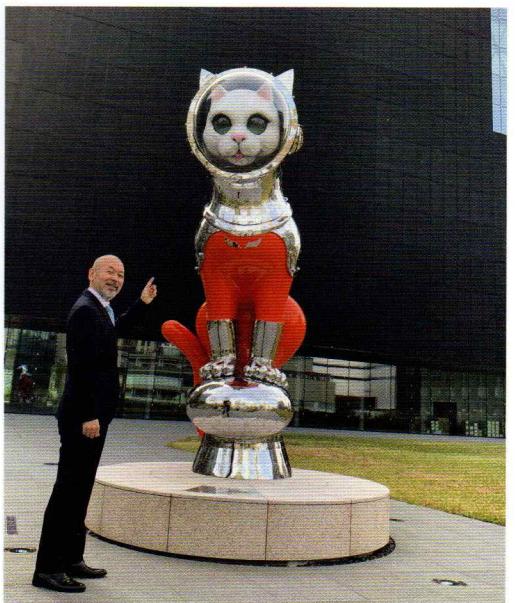
中之島美術館は目指しています。

館内は5階建て。延べ床面積は約2万12平方㍍。敷地面積は1万2870平方㍍で、建築面積は6680平方㍍。中之島周辺にはこのほか国立国際美術館、大阪市中央公会堂、大阪府立中之島図書館、大阪市立東洋陶磁美術館、こども本の森・中之島など、文化施設が集積している。

同美術館は大阪府大阪市北区中之島4丁目。アクセス:京阪中之島線「渡辺橋」駅より徒歩約5分、大阪メトロ・四つ橋線「肥後橋」駅より徒歩約10分
webサイト:<https://nakka-art.jp/>

第一弾として、『Hello! Super Collection 超コレクション展—99のものがたり—』(2022年2月2日(水)~3月21日(月・祝))を開催します。本展では、同館コレクションの中から代表的な作品を厳選して展示。また、それぞれの作品が収蔵に至るまでやその後の展示活動の中で人びと紹介できた物語をあわせて紹介しています。

第二弾は、『モディリアーニ 一愛と創作に捧げた35年—』(2022年4月9日(土)~7月18日(月・祝))を開催。イタリアで生まれ、フランスに渡り、エコール・ド・パリの一員として活躍した、アメデオ・モディリアーニ。当館が所蔵する「髪をほざいた横たわる裸婦」(1917年)をはじめ、国内外から集められたモディリアーニ作品を一堂に展示とともに、同時代のパリを拠点に繰り広げられた新しい動向や多様な芸術の土壤を示し、モディリアーニの芸術が成立した軌跡をたどります。



巨大な猫のパブリックアートについて語る菅谷館長